

私の履歴書

前まえ橋はし江え子こ

②

戦前は何をしていたのか、本人はあまり語ろうとしなかった。30年近く前、父の没後に編んだ追悼文集に旧制武蔵高校の同級生だった岡倉古志

けぬままになった、と。

母の輝子は23年生まれ。母ある日、結婚して東京都杉並区の荻窪に住んでいた母を秀夫が訪ねてきた。43年春のダンスホールに繰り出したというモタンな人で、私がバイオリンの練習に励んでいた小学生の頃は、来日した一流演奏家のコンサートやオペラに何中尉は戦地に赴く。それが今生の別れとなつた。駆逐艦

兩親

術を学んだ。戦後は都立北豊島工業高校で社会科の教師を務め、歴史や文化に造詣の深い人だった。

高校教師の父歴史に造詣

「生まれ変わり」信じた母

郎さんが寄せてくださった文りあったという。

＝ 文楽や歌舞伎、芝居が大好きで、熱心に劇場通いをしてきたが、音楽にはまるで関心がない。珍しく私のコンサートに来てくれたと思

った。岡倉さんは日本近代美術の父、岡倉天心の孫に当たって、国際政治学者として数々先に入所していた岡倉さんの推薦だった。

その後、父は38年に新設された近衛文麿を総裁とする東亜研究所に入っている。一足

度も連れていってくれた。妹の夫、正二の30歳の誕生日に
 龍夫の長男で母の2歳上の 43年12月11日、母は無事に
 兄、秀夫も江田島海軍兵学校 長女を出産する。父の好きだ
 に入り、軍人になった。とて

つたら「山田五十鈴の舞台中継が始まるから」と途中で帰ってしまったこともある。

父は京大、岡倉さんは東京大学に進んだ。その年に時の文相が京大の滝川幸辰教授を

父が戦後、高校教師になつたことについて岡倉さんは「意外の感に打たれた」と記

退職後は竹細工に凝り、個性を伸ばした有名な「滝川事件」展まで開いた。「本当は職人になりたかったんだ」と漏らす。あるとして、戦前最大の学生

している。どこかの大学教授になれたはずなのに、なぜそうしなかったのか。理由を聞



母に抱かれる筆者

生の別れとな
った。駆逐艦
新月は43年7
月6日、南太
平洋ソロモン
諸島沖の海戦
で撃沈され
た。くしくも

秀夫は少尉として戦艦榛名に逝った兄、秀夫の生まれ甕に乗り、中尉に上がつて駆逐わりと固く信じるようになった。(バイオリニスト)